

狗

正冈子规

(翻译 陈焰)

长话短说，从前在印度有一个名叫“阇伽卫奴”的国家，“和奴和奴”是该国的国王。该国上至国王下到国民都非常爱狗，但却有这么一个男人，他把国王的爱犬杀了，掀起了轩然大波。最后他因此犯了罪，不仅被判处了死刑，来世还被贬到了偏远小国日本，一个名叫信州的寒冷之岛转世成了一条狗。

却说信州是一个多山而少鱼少食物的地方。这条狗便来到了姨舍山，靠咬死并吞食扔来这里的老婆儿为生，其行径实是卑劣。然而当他吃到第八十八个老婆儿时，黄昏时的第一道星光突然让它醒悟，它开始意识到自己作为一条狗却如此残忍地吞噬人类，罪孽将是何等深重。

于是它即刻跑到善光寺，先忏悔迄今为止自己所犯下的一件件一桩桩的罪，再祈求转世做人。就在被它咬死并吃下的第八十八个老婆儿的头七夜，它在檐下彻夜祈祷。这一天是结缘之日，果然一个小阿弥陀佛立到了狗的枕头上：“吾成全汝皈依佛门之愿望。朝夕念经恪守信仰吧。如是畜生起了菩提心，善哉善哉”。狗抬起头眼睛向上仰视，梦醒了。

狗得到了天启并获得了力量。就这样狗便到各地的灵地去朝拜，一是想吊唁被自己咬死并吃掉的老婆儿，再就是要实现自己还原人类的宏愿。它遍历各地终于来到了四国。

这里是有八十八个灵地的地方，它认为祭一个坟便能免去咬死一个人的罪过，祭两个坟便能免去咬死两个人的罪过。于是狗嘴里哼哼着“佛光普照，金刚力士”到处跑，八十八个灵地一个不漏地朝拜，就在快到最后一个灵地的关键时刻，可能是因为精神松懈，它便在寺

庙的门前倒下了。

想起来实在是遗憾至极的事，它痛苦地挣扎着抬起头向上望去，眼前立着一个没有鼻子的地藏王菩萨，狗向着地藏王菩萨祈祷：“来生必要成人，祈求大愿地藏王菩萨慈悲护持六道一切众生，在通往人界的路口立上一个标记作引。待如愿以偿转世成人，定呈上一块红色绉绸围嘴儿”。

于是地藏王说：“祈愿既受，宏愿已实现”。狗听得宏愿已遂，大喜不能自抑，身体连连打转，并连哼了三声后就死掉了。

没多久不知从何聚来八十八只乌鸦，对着狗的肚子和脸一通乱咬乱啄，场面十分残忍。路过这里的僧侣见此状觉得此狗甚是可怜，就把这条狗的尸体给埋了。

地藏王菩萨见了这一切后说：“八十八只乌鸦就是八十八个老婆儿的怨灵，她们是为复仇而来，让它们吃去吧，这样才能消去此狗今生之罪过以得来世之顺当。这么埋了，也许是慈悲也许不是慈悲，若此是前世报应的不尽缘故也实是无奈，其来世即便成了人，一生也都将被贫穷和疾病所困扰，无论如何也只能是平平庸庸碌碌无为了。”——如上所说，有这么一条狗，它的来世就成了我。如此是说的证据，在于我这两条完全站不直的腿，仅能像只狗爬着转着。

.....
正岡子規(1867-1902):日本歌人、俳人。本名常规，生于爱媛县。俳句创始人。他的一生病魔缠身，他以疾病为契机，在于病魔斗争中著下了诸多无与伦比、魅力无比的奇作。其魅力就在于他浇注到作品中的顽强的生命力。本篇选自于他的病中日记《小杜鹃》的第三卷第四号。



(日本語原文) 犬 正岡子規

長い長い話を縮めていうと、昔天竺に^{あかいぬ}閼伽衛奴国という国があつて、その王を^{わぬわぬ}和奴和奴王というた。この王もこの国の民も非常に犬を愛する風

であったが、その国に一人の男があつて、王の愛犬を殺すという騒ぎが起つた、その罪でもってこの者は死刑に処せられたばかりでなく、次の世には粟散^{ぞくさんへんど}辺土の日本という島の、信州という寒い国の犬と生れ変つた。

ところが信州は山国^{さかな}で肴^{さかな}などというものはないので、この犬は姨捨山^{おばすて}へ往みて、山に捨てられたのを喰うて生きておるといふような浅ましい境涯であつた。しかるに八十八人目の姨を喰うてしもうた時、ふと夕方の一番星の光を見て悟る所があつて、犬の分際で人間を喰うといふのは罪の深い事だと気が付いた。

そこですぐさま善光寺へ駈けつけて、段々今までの罪を懺悔した上で、どうか人間に生れたいと願うた。七日七夜、椽の下でお通夜して、今日満願といふその夜に、小さい阿弥陀様が犬の枕上に立たれて、「一念発起の功德に汝が願い叶え得さすべし。信心怠りなく勤めよ。如是畜生発菩提心、善哉善哉」、と仰せられると見て夢はさめた。

犬はこのお告に力を得て、さらば諸国の霊場を巡礼して、一は、自分が喰い殺したる姨^{ほだい}の菩提を弔い、一は、人間に生れたいといふ未来の大願を成就したい、と思つて、処々経めぐりながら終に四国へ渡つた。

ここには八十八個所の霊場のある処で、一個所参れば一人喰い殺した罪が亡びる。二個所参れば二人喰い殺した罪が亡びるやうにと、南無大師遍照金剛と吠えながら駈け廻つた。八十七個所は落ちなく巡つて、今一個所といふ真際になつて気のゆるんだものか、そのお寺の門前ではたと倒れた。

それをいかにも残念と思つた様子で、喘ぎ喘ぎ頭を挙げて見ると、目の前に鼻の欠けた地藏様が立つてござるので、その地藏様に向いて、「未来は必ず人間界に行かれるやう六道の辻へ目じるしの札を立てて下さいませ。この願いが叶いましたら、人間になつて後、きっと赤い唐縮緬^{よだれかけ}の涎掛^{よだれかけ}を上げます」、といふお願^{がん}をかけた。

すると地藏様が、「汝の願い聞き届ける、大願成就」、とおっしゃつた。大願成就と聞いて、犬は嬉しくてたまらるので、三度うなつてくるくると

まわって死んでしもうた。

やがて何処よりともなく八十八羽のカラスが集まって来て犬の腹ともいわず顔ともいわず喰いに喰う事は実にすさまじい有様であったので、通りかかりの旅僧がそれを気の毒に思うて犬の屍を埋めてやった。

それを見て地蔵様が言われるには、「八十八羽のカラスは八十八人の姨の怨霊である。それが復讐に来たのであるから勝手に喰わせて置けば過去の罪が消えて未来の障りがなくなるのであった。それを埋めてやったのは慈悲なようであってかえって慈悲でないのであるけれども、これも定業じょうごうの尽きぬ故なら仕方がない。これじゃ次の世に人間に生れても、病気と貧乏とで一生苦しめられるばかりで、到底ろくたまな人間になる事は出来まい」、とおっしゃった、

……………というような、こんな犬があつて、それが生れ変って僕になつたのではあるまいか。その証拠には、足が全く立たないので、わずかに犬のように這い廻っておるのである。

『ホトトギス』第三巻第四号 1900・1・10

……………

本文テキストは青空文庫（日本ペンクラブ電子文藝館編輯室）よりダウンロードし、歴史的かなづかいを現代かなづかいに改めたものです。